

シャワーを浴びた、幾分帳が早くなったと想いつつ一平は台所に立って居た。何時もはまりが夕飯を作っておいてくれるのだが今宵は違う、中学校時代のまりのクラス会の日だ、夕飯は小生が作り食するからゆくりしてきなさいと送り出した。

人参、タマネギを刻み中華鍋に入れ炒める、見計らいシャリを入れジャージャーと、誰も褒めてくれない、上手いもんだと一平風に中華鍋に語った、溶き卵を掛けてチャーハンは出来た。スモークハムをカットしサニーレタスを皿に盛る、いつぞやこの界限にお屋敷を構える奥方にご教授して頂いた皮むきトマトをサッサツとカットし同じ皿に添えた、これで夕飯と肴の出来上がり。

八時だテレビを付けた、真田丸のオープニングを見ながらグラスにレミーマルタンを注ぐ。

片づけが終わった頃ただいまとまりが帰ってきた。

「お帰り、どーだった今日のクラス会は」

「最高だったよ、先生もよっぽど嬉しかったんだろう、グジャングジャンに酔って、幹事さんが送る始末だった、教え子が皆立派になって始まる前から一人一人と握手はすれど目が薄らと潤るんでいた。

「挨拶と乾杯をお願いしますと幹事さんに言われるとスクツと立ち、今日は時間の許す限り語り合い飲もう、そしてカンパイだ、先生の挨拶はとかく長いと想っていたが十数秒、これが皆に受けたんだな大発声と拍手で端から盛り上がった」

「挨拶は短いが一番、先生も心得ていたんじゃないか」

「白いものも目立ったり薄い人もいた、重役やら大手銀行店長さんも、しっかりと奥方に納まっている人も多いしキャリアウーマンも複数人、成長した皆を見る先生は綻びばなし、皆もYYと盛り上がりっぱなし、楽しい時は過ぎるのが早い私も話半ばでお開きとなっていました。幹事さんが気を利かせ二次会と相成った、だけど先生は満足に歩けない、でも先生は次回は何時だ次回も来るぞと手を振りタクシーに乗り込んだ」

「小生等の先生もそーだ、教え子が立派に成長した姿を見、顔をくしゃくしゃにして喜んでた」

「クラス会はカンパイと同じして食べて飲んだ、幹事さんは頃合いを見計らいこれからはフリートークを受付します、どなたでもご自由にと言葉が。満を期したか石井君が立ち上がった。食べながら飲みながら話しながらで構いません、だけど耳は僕の話に傾けて下さいと話し始めた」

石井はビールを飲み干した。

「とある懇親会でこんな事を言った人がいます、お聞きください。又、一度は聞いた人もいるかと想いますがと前置きした。聞いた事のある人は確認の意味でお聞き下さい、そうでない人はどうしてそうなるのかとお聞きください。一ケタの数字の順不同で加減乗除を数回繰り返すと答えは必ず3になると言うう数式です」

なーんだ数学かため息もちらほら、ため息は終わってからと石井君は言う。

「難しくはありません簡単です、では始めましょう皆さんも一緒にお願いします、一ケタの数字は今月が八月だから8としましょう、それに1を足して下さい、9になりましたそれを2で掛けて下さい18になりましたね、ならない人はいませんねと辺りを見回した、戸惑っている人も数人、今度は4を足して下さい22になりそれを2で割って下さい、11になったと想います。その数字から最初の一ケタの数字を引いて下さい、3になる筈です。一ケタの数字をこの数式に当てはめると必ず3になります」

今、石井君が決めた数字だったから3になったんじゃないのと仲の良かった国尾女子が突っ込んだ、じゃー国尾さん数字を決めて下さいと言い返した、間あつて国尾女子が言った、4でお願いします。

はー、分かりました、石井君はどんどん行きますよと。

「4に1を足して下さい、それに2を掛けて下さい、更に4を足して下さい。ここで石井君は辺りを見回し略の人が14になりましたね、何人かがあれつあれつと言うような。

それを2で割って下さい、7になった筈です、最初の一ケタの数字は何でしたっけかの石井君の言に数人が戸惑いを

見せた、7から最初の数字を引けば3になります。なったでしょう、はいになりましたと言う者のどこか後ろめたさの人が、略全員の人が3のなったようですが誰とは言いません、ならなかった人がお出での様です、何故ならなかったのか皆は左右を見ながらはてな印、徐に石井君は言う、それは単なる計算違いです、で大爆笑、これで石井流数学講座は幕とします」

「そうかそんな数式があつたんだな、どつかで使ってみつかな」

「一平が捜査、調査している事案に当て嵌める事出来ない、例えば失踪中の特殊隊員寺島加奈、美貌で射撃と武闘家と聞きます、美貌はここでは置いといて、射撃と武闘に反国王派を加えたらどうだろうか、マキちゃんを襲った情報屋田川を加え、チンピラのケンとアキを加えれば答えはキザ監察官になる。一平、私の数式はどう」

「無理やりこじつけたようだな、又、加えるだけで減乗除が無いではないか」

「推理の仕方を言つたまで、答えを先にして何を加えれば答えになるとか、引いたり掛けたり割つたりその度当て嵌めたりしたらどうなのか」

レミーマルタンを一口飲み、小生流に数式を使ってみようと一平が言い出した。

「キザ監察官にピース王国のシャルム一等書記官＋反国王派のラリフ中島＋射撃の名手、寺島加奈隊員を加え4で割ってみれば答えが出る、どーだ小生流の数式は」

「答えは何になるの」

「まり、鈍いなー小生流の数式、分かんないのか何年デカの女やってんだ、答えはなー、反国王派によるクーデターになる」

「穏やかでないね、で誰がいつどこで起こすのクーデターとやらは」

「それが分かりゃー苦勞せんよ、それより前にも言ったがいつ危害を及ぼす奴らが来るかも知れん、出かけた時や小生のいない時には特に氣負つけてくれ」

「一平、忘れたの違反者に恐れられていた元白バイ隊員、デカの女として何年になるの、で、私にも覚悟と言うものがあります、一平こそ気負つけてね」

おっそうだったなと言いい、レミーマルタンを飲み干し時間だ寝るよとベットルームへ、一平の背にまりは語り掛けた、歩が止まり振り返る。

「緋の浴衣で店に出ていた時、下着の線が出ていないのに気付いたクラスメートに言ったでしょ、Tバック着用しているから見えんのよと」

「あー言ったとも拙かったかな」

「そーじゃないのクラスメートが一人で買いに行く自信ない一緒に行つてとせがまれた」

「そんで行ったのかい」

「二次会には間があつた、二人でデパートの下着売り場に直行、ぎこちない仕草だったが私が居るので我に返ったか物色し始める、そしたら7枚も買ったのよ驚き！、そんなにいつぺんに買わなくてもと言ったら一週分揃えたのだから、なんせ彼女のご主人は一回りも年下、日替わりするんだって、まりも一週間分揃えたらと私、もろに当てつけられた、彼女の勢いに乗じてレース物を買ってしまった、今宵着用してお邪魔しようかしら」

一平は一言ウツつと発し、小生の寝る時間は過ぎているとベットルームに行きタオルケットを引っ被ってしまった。

一時が過ぎた刑事の感だろう、何時ものようにまりが入って来たにしてはちーと違う、良からぬ侵入者でもと眠気と小競り合ひし薄目で窓を見た。確り締まっている、小生の感違いかと言葉にならんような独り言。一平、良からぬ侵入者はこつちよ、とベットルームを開けながらまりが声した。

焦点が合わぬ眼をし顔だけをその方向に向ける、まりが後ろ手でドアを締るのが見えた。

「一平どう、なかなかでしょ」

白いレースのTバックにクリーム色のスケスケミニネグリジェ、まりがモデルウォークを始めた。

「これ覚えている、新婚当時着用していたものよ」

空かぬ眼の一平はポカーン。

「シャワー浴びた、それで、あつ、いつけないごめん、無許可でレミーマルタン飲んじゃった」

幾分、上気気味なまりはモデルさん宜しくひと回りふた回り、お邪魔しますとネグリジエを脱いだ。タオルケットをそつと開き一平の脇へ、右肘を付きながらヘッドボードに左手を伸ばす、程よく隆起した二つは一平の顔の前に、まりはヘッドボードランプを弱にした。

只今と一平は朝散から帰ってきた、トントントンと包丁がリズムカルな音をたてている、お帰りとなり、オッスといつもながらの一平。

「今朝はアジの開きに長ネギいっぱい入った納豆とナスとカブの糠漬け、味噌汁は乾燥ホタテにエノキにコマツナ、ミョウガを少々だよーん、直ぐできるからね」

あいよ、急ぐ事はないよと新聞を広げた、深大寺谷端家の朝の何時もながらの会話だ。朝飯は終わり、まりが片づけを始める、一平はお茶を入れ再び新聞を広げる、同じして固定電話が鳴った、この電話知っているのは極僅か思案顔で立ち上がった、私の方が近いと一平を制しまりが出た。

受話器をとり谷端でございませとまり、次の瞬間頭の天辺から声が出た。

「うっわーおーご無沙汰しています一平、八丈の高柳先生だよ」

「久し振りだなー、まり、しゃべりたかったら話してていーよ」

と言い一平は洗面所に行った。

「先生、娘が連れ合いの出張に合わせてお邪魔させて頂きまして有難うございました。ルンルン気分で帰ってきました、レンタカーからガソリン食事代等々全て出してくれたよ、使ったのは八丈までの飛行機代とお土産代だけだと言ってい

ました」

「いや、こちらこそ有難うございました。教え子が表敬訪問、嬉しい限りでした」

「一平は言うには高柳先生はお孫さんはいるが八丈じゃー独り者だぞ、って言うの、私も一瞬戸惑ってしまった、が娘が言うには校長先生と同じ屋根の下で一夜を過ごす、そんな想い出作りに行くんですと効かない、一平は行つてらっしゃいと小遣いを渡した。余ったら八丈の焼酎を買って来てくれて言つてた。私も何時しか二人がなすまま小遣い渡しました、先生黄八丈のエプロン買ってくれました」

「私の教え子です確りしています、職務があり晩度一緒とはいかなかったが地図を見ここかしこに出向き見分を広げていましたよ」

「先生、娘をそんなに褒めないでその氣になってしまいます、連れ合いのセイちゃんが言っていました、家では炊事洗濯、家事は今一ばかりと」

「家庭は憩いの中でもあります、やれやれと手足を伸ばす場です、ご家庭でいかががお過ごしでしょうか存じませんが外での娘さんは自分を見失う事はありません」

「それもこれも先生あつてです、お陰様で昨年暮れに子が出来ました」

「生まれて間もなく写真入りで赤ちゃん誕生の知らせが届きました」

と高柳先生は言う

「えっ娘、生まれた事は誰にも言うなときつく言つてたが先生だけには知らせたのかな」

「母上殿そうじゃない、皆をびつくりさせたかったですよ、会長さんやまり殿が歩美に子が出来たと言われたんじゃない、びつくり度が半減してしまう、自ら皆に知らせたかったです」

「そんな策を想いつくのも小学校時代、校長先生を始め先生方の良きご教授のお陰です」

「あいや、まり殿お待ち下され、会長さんには教職員皆どんなに安らぎを与えてくれた事か、僕等が行き詰まってい

た時会長さんが右手を挙げオッスと教員室に入って来る、そんな気取らん会長さんが傍にいただけで先生達に自然と笑みが出るんです、不思議と難題の解決策も沸いてきます、そんな会長さんにどれほど助けられた事か僕等は感謝頻りです」

「誰にでも出来る事です、挨拶もしどろみどろ大した働きも出来ず、また学校に行くんですか、皆に迷惑になるんじゃないかとよく言ったものです、そうしたら教職員とPTAで泊りの釣りとバーベキュー大会の打ち合わせに行つてくると、カラオケもやるんだぜ何だったらまりも行つたらつて言うんです、いいぜー。私は返す言葉が出なかった」

「そんな会長さんだからPとTは上手くいくんです、学校も安泰でした、まり殿はご存じないかも知れんが挨拶だつて確りしていました、卒業式にPTA会長の挨拶、今年はどんな事を話すだろうかと教職員は楽しみにしていました。起立、礼で一平節は始まつた、二分を過ぎた頃卒業生の皆さんと一人一人を見渡し一呼吸した、皆さんにはちよつと難しいかも知れない。分からなければご家庭に帰つたら保護者の皆さんにお聞きください、保護者に向かいご家庭は教育の場でもありますと前置きし話した。(冬来れば春遠からじ)ですと一平節を締めくくつた」

「一平が戻つて来た、いろいろと有難うございました電話変わるね」

「高柳さん、久し振りだなー息災のようで、まりがぐじゃぐじゃ言わなかったかな」

「言わんとも仲が良いようで」

まりの奴、何か言いやがつたなと掃除機をかける後姿を見た。

「ところで朝から何用で」

「おつ御免、まりさんに当てられつばなしで話損じるところだった、35度の美味い芋焼酎が手に入った、まりさんと飲みに来ない、課外授業はあるが学校は休み、付き合ひできる、どう」

一平は行きますと一つ返事、ちよつと待つてと高柳先生に言い、まりに同意を求めた。

「来週はいつぷくで行く夏を忍んで冷やしコーヒ一半額セールなの、店を閉める訳にはいかないし一度行つた事ある、

幼稚園は休み中、常日頃捜査に協力してくれているマキちゃんを誘ったら喜ぶと想うよ、何だったらCAさんやさちゃんにも声をかけてみたらどうでしょう」

うー残念だなー、そーしてみるかと思き受話器を持ち替えた。

「残念だがまりはいっぱくの都合で行けん、台風が来そうだが週始めには行ってしまうだろう、今度の木金辺りで小生は行くとします、焼酎好きな女性がこれからアポとってみる、アルコールは小生より強いと豪語している女だ、いいかな」

「いいとも小学校の校長と言えども男に変わりはない、女性と飲めるなんてこの上ない」

「つもる話はあるがその時で、日程とメンバーが決まったらすぐ連絡する」

一平は八丈での飲み会を楽しみますと切りマキに電話した。

「悪い話ではない、まだ幼稚園休みだろ話したい事があるいっぷくに来ない」

「えっー何だろう改まって、午前中は二学期の準備で行かなくてはならないけれど午後ならいいよ」

そんじゃー午後待っていると言いかメラを取り出しデジカメ様との散策準備を始める、何時もの様に冷やしコーヒートチーズケーキをまりが揃え今日は何方へと。

「多摩川にでも行つて来るか、サギ類を撮つて来る予定だ、他に河原の夏草にむながる昆虫でも」

一平は早馬に跨った。

台風続き、雨天も多かった八月だが今日はガン照、遮るものがない河原だ否応なしに汗が沸いてくる、遠くの浅瀬でアオサギとカワウが日向ぼっこ、暑くねーんだろうか余計な心配をし数ショット、堰堤まで下ってみた、水量もあり流れ落ち泡立っている、幾分涼を感じられるコサギ、ダイサギが採食しているんだろう跳びはねては川底を突っついている。昨夜凍らしておいたコーヒーを出していた、氷はまだ解けてはいない、容器からしゃっこのが伝わって来る、一口二口

生き返った感じがする、堰堤左手奥で小さく見える動体二つ、双眼鏡を出し確認、尾羽を上下に揺すり歩くハクセキレイ、浅瀬で尾を振り歩きし水生昆虫を探しているんだろうイソシギ、想いっきり引つ張たが点にしか映らん。

土手にある数少ない木陰のベンチでチーズケーキと冷やしコーヒードで一休み、これと言って出が少い、早いが陣払いと相成った。

昼ちよい前いっぶくのドアを開けただいまと、オウム返しにお帰り早かつてね今作るからとまり。

いっぶくはコーヒードショップ故食べ物にはトーストとパスタそれにチーズケーキのみ、でも程よい量なのか女性客には軽食として受けている、が一平には物足りない、まりは知っている。

大盛りパスタとチョー厚切りトーストが出て来た、料金は確りと頂きますとまり、ナヌツと言った表情の一平にここはコーヒードショップいっぶくでございませと笑顔で返した。固まりかけた一平だったがあつそうかと無言でこっくり。

昼時だ女性五人がまりさんランチお願いと入って来た、三鷹署総務課の女性と婦警さん等だ。

「あらっ一平さんじゃないの、まりさんのパスタ美味しいと顔に描いてあるよ」

アラフォーの総務課員が話しかけた、一平はモグモグしながらコックリを二回、要約口ん中が空になったかアラフォーに返した、まりの奴、確りしてんだよ料金取るんだよ。

「たとえ夫婦だつていっぶくはれっきとした店、お金はとらなければだめと私が言いました」

キョトンとする一平はまりを見た、ランチの準備をしている背が笑っている。

「名うての元デカ長さんも女性には敵わんようだね」

今度は主任婦警さんが言った。一平はタジタジ、

彼女等のランチが出て来た、いっぶくは静けさを取り戻す、げんきんなもんだ食べ物が出て来たら途端に静かになりやがったと聞こえん様に。

「一平御免、遅くなっちゃったー待った」

とマキが咳き込んで入って来た。

「そんなに慌てこんでもいいのに」

とまりが言う、並パスタとトーストをとマキが言った、小生にはコーヒーのお代わりを、武闘家のお嬢さんのお出ましです、ね、昼からデートとはと婦警さん等はひやかし、まりにゴッさんと言っていつぶくを出て行った。

「明日に回せばいいのにと思うが今日中に終わらせてしましましょう、と麻耶教頭があれこれ作業押し付けるんだもん、こんな時間になっちゃった」

「仕事があるのは幸せと想わにやー、まして可愛い園児の為やないか」

「はい、そう想っております、ところで一平、話したい事があるとは何の事やね例の一件絡み」

「いやそーじゃない、マキに言った事無かつたつけかな八丈島にいる高柳剛志校長を」

「八丈島の校長先生、知らない初めてだよ」

「伊豆諸島端っこの島、この島の校長と何処でどうの知り合いかは後にして本題に入る、35度の芋焼酎が手に入つた、久し振りに一献傾けようじゃないかと今朝連絡が入った。鳥さんはアカコッコ位と思うが行く事にした、マキ行ってみないか」

「行くとも何時」

「来週初めは台風だ、通り過ぎた水木辺りで予定しているんだ、マキは休みだろ」

「はい、休みです美味い焼酎と聞けばのりもりえもさちさんもある誘っていい」

「無理と想うが連絡してみて」

「おいきた、任しといて」

のりは搭乗中だろう、ラインしといて海老原幸子さんにマキは電話入れた。

国王来日準備室海老原ですと業務言葉で出て来た。

「自分だよマキだよ、今電話大丈夫」

「この部屋は今誰もいない大丈夫だよ、こないだの花火見物飲み過ぎちゃったけど楽しかったよ」

「自分もあくる日はちーと、所でさちさん八丈島にいる一平の友達が焼酎の美味いのが入った一献傾けようと誘いがあつた、都合ついたら一緒どう」

「一平さんは付き合いが広いんだね、島焼酎と魚が美味しい、堪らんね行くよ何時」

「来週の水木を予定していると言ってた」

ウツと発し海老原幸子は固まってしまった。

「今週の土曜日から来週いっぱい 準備室のメンバーで本国に行き来日の最終打つ合わせに行くんです、私もメンバーの一員に入っているんです、本場の芋焼酎残念だ」

「さちさん一平に頼んで一本買ってきてもらおう、飛びっ切り上等な芋焼酎を」

「マキちゃん有難う待っているわ、そこに一平さんいる、いたら出して伝えたい事があるの」

「おお、さっちゃん元気印の様だね、電話の内容は分かったよ残念だ、ボトルはマキに任しとくよ」

「はい分かりました、だけど変わったのは焼酎の話じゃないの」

「て言う和白家補佐官や反国王派に動きでも、不明な特殊隊員寺島加奈の出現したとか」

「相も変わらず時折不穏な動きや電話はあるがこれと言ったところ、今日伝えたいのは国王来日日程が決まりました、十月十三日から十九日までの一週間、一日目は天皇陛下との晩さん会二日目はテレビ局でのプロモーションビデオ撮りと旅行会社へあいさつ回り、四日五日は京都に六日七日と最終日は王女ユンザリアの希望もあつて八丈島に、宿は民泊するが何処かは決まっていない、王妃ならずユウゼン見たさに国王も潜るそうです。六日目の朝便で行き午前中はナズマドで潜り、午後は八重根で夕刻まで、七日目は潜りと飛行機は相性が悪いので終日島内観光、八日の午前の便で羽田に戻る予定です。詳細が出たら又伝えます、あつ、誰か来る私が推薦するピース王国の酒買って来る

ね、マキちゃんに宜しくってね」

「ありがとう行つて来る、土産はマキが任せると言つてた」

一平は電話を切った。

「さつちゃんは行けない、のりとりえはどーだろうかまだ連絡入らない」

「まだだよーん、さつちゃんから来日日程を聞いていた一平の眼がサンマになっていたよ日程に何か」

「別に、そーかそんな目付きしてたか」

「でも一平PTA会長やつてたのしーらなかった」

「そーかまだマキには言つてなかったか娘と倅の小学生時、ひよんな事でPTA会長を仰せつかった。人前で喋るなんて、会長挨拶も多し警察署勤め、一平には無理とまりが言つた、そーだなと小生も相槌打つた、再三お断りしたんだが根負けし有休を使えば会長職も務まるだろうと引き受けたんだ」

「活字知つたる先生方と児童達を前に話するんだ毎回冷や汗もんだつた、まりなんか下向いて笑いを堪えてんの」

「いいじゃない一平会長は偉いんじゃない親しみが湧いて来、距離がちじまんじやないの」

「今もその当時は想い出すと背にじゅわーっと汗が」

「その後どうなったの」

「小生流で行こうと決めつけた、まりが今日校長先生と長い事話していたが何を話していたの、何か難しい事でもと、否難しい話ではない遊びの話をしてたんだ、来月二週目の土日に先生方で行くPも募つて行こう如何かな会長さん」

「そんで一平はどうしたの」

「断る訳ないよ即決」

「そんな事、話してたのとまりは怒り心頭」

「それからと言うものどうなったの」

「小生、自慢話は好かんが事の流れた話そう、PTAにプロはいない失敗や間違いはあるもの、恐れず自信を持って取り組んでほしい、難しい話は僅かにして残りは楽しく、役員さん等には事が拗れた場合には小生が対応する故活動してくれ、同じやるんなら楽しくだ、こーして一平PTAは始まった、なりて少ない役員を引き受けてくれた保護者さん達、普段経験出来ん事多しPTA活動、前向きに取り組んでくれた。何時しか会長さんはそこにいるだけでいいと副会長さんを始め役員さんは言った」

「デカ長時代の一平がその頃出来ていたんだね」

「そりゃー変わった考えの先生もいたが小生流考え方話し方、行動に共感も多々カラオケで調子っぱずれな高校三年生を良く唄わせられた」

「それ訊いてみたいな、いつぶくで唄って」

「もーそれは封印した。当時教務主任だった高柳さんと意気投合釣りやキャンプに良く行ったなー、その頃からの付き合いだよ、転出し教頭になり校長試験に合格し行った先が八丈の三根小学校、釣りと山と海だ願い叶ったり三年の任期を五年に延ばしたんだ、任期満了で東京に戻り統括校長に、三年後八丈が恋しくなり再度八丈に渡り三原小学校に着任し現在だ、会長さんもご存知の通り俺には孫もいるし東京に家もある、だけどここに骨を埋めるつもりだと昨年行ったとき笑っていた」

統括校長努めている人が行くなんてよっぽど八丈に惚れ込んでいるんだねとマキ。

「理科が専科だ観察や研究資料も豊富、楽しみ事も多い、等々で希望出したんだ、そんな高柳校長に小生も同調し今でも付き合があるんだ」

「今の八丈島は夏真っ盛りだよ、想いつき肌出せるよね」

「小生は甚平と想っているが上下ちよこんとした布だけは勘弁してくれよな」

ゆく夏を惜しんで想いつき自分流のファッションで行きます、とマキが言い始めた時峰不二子のテーマが鳴った、のり

からだをONした。

「ライン入ってたけどなーに、今沖繩に着いたところ」

「一平の永ーい友の誘いで八丈島に芋焼酎飲みに行くんだけど行かない」

「うつひゃー堪えられんよ本場の焼酎、でいつ八丈に」

「来週だ、友の都合もあるし台風が行き過ぎるであろう水木だよ」

「マキ、自分はガンだよ、未だチーフパーサーから指示は出ていないが台風接近、通過中、CAはオフに関係なく待機を命じられてしまう、行き過ぎたその日辺りはシツチャカメツチャになってしまう、無念ながら」

「のり、八丈島は逃げない焼酎も、世間では今度はないと言うが自分達には今度はある一平に言っとく、自分達の都合に合わせて八丈行を、それと芋焼酎を買って来るように」

「マキ有難う、戻ったらそれで盛大に酒宴を」

了解と言うマキに一平は口をへ字に。

「一平、校長先生の家に泊まるんだよね夜具は何にしようか、布切れだけの衣装はまだ売っているかな。五月、戸隠に宿泊鳥観察会に行つて以来だ久し振りだね二人での宿泊は」

「今女子等それぞれ個人の自由、何でも良ーがそのー」

「ハッキリ言ったら、小さな上下の布切れだけは止めてくれて、言われてもやめないよ個人の自由だから、飛行機はのりが取ってくれるようだ」

そんな二人のやり取りにまりの背が笑っている。

正に台風一過、抜けるような青空だ、一平はカーゴパンツにチェック柄のシャツを着こんだ、早馬に跨った、羽田までこれで行く予定だ、まりが意味ありげな笑みを浮かべていつてらっしゃい。

北野流道場門前に着いた、一平はあれつとした表情で時計を見た。マキが居ない、何時もは時間前に来ているのに、門前から大通り方向にかけて地べたすれすれの淡い黄色のスカンツでボタニカル柄のブラウスに幅広の白帽子を被った女性が行ったり来たりしているだけ、もー一度時計を見た十分過ぎた所。

自分はここにいるよと手を振りながら白帽の女性が近づいて来た、なんとマキだ。

「一平これなら文句ないでしょう」

とその場回りした。

「ピンヒールは初めてで歩く練習していたんだ」

文句言いやないが布多き極端な変身、何かあったのか、あつそーかと一平は拳をポーンと叩きマキ、ひよつとしたらと、ピボン正解、まりさんの差し金よ、土曜日に一緒に行き買って来ちゃった、このピンヒールもよと言いながらバタバタする裾を纏めながら早馬口に乗り込んだ。

「まりの奴午前中だけいっぶく、お願いねと出て行つた、慣れぬ手つきでコーヒール入れた、府中署の刑事さんが三人と調布署の婦警さんが四人だったが於保つかぬ手つきにひやかれっぱなし」

「上手になつたでしょ」

「いい加減にせい、今も背に汗が一筋するようだ」

「このループピアスピったしでしょ、プラチナよと耳を一平に向けた、ツバ広の帽子には似合うよとまりさんが貸してくれたの」

「どおりでどつかで見たようだった」

「お陰様で図面通りに買う事が出来た、ありがとう、でも八丈に着いたら自分流に変身します、二度と見られないかもしれないよこの出で立ち、写真でも撮る」

「勝手にしろ、路銀は忘れんだろうな」

「一平それ古いよ死語だよ、のり達のお土産代は持って来た、後は出してくれんでしょ、何ならそれも出してくれたっていいよ」

「アホ言うな、余計な金子など持ち合わせて来ん、カメラもバック奥に仕舞い込んでしまった撮れん」

「じゃーガラケイあるんじゃないん」

うっーもーとマキは呻く、片手で撮りフルフェイスをかぶり直した。

「でも好きよ一平」

マキはそんな怒った顔が見たかったかサングラスをずらし一平を見言った。

一平は無言の了解とも言える仕草をする。

多少飛行機は揺れたが予定通り八丈空港に着陸、高柳先生とレンタカー会社のお嬢さんが出迎えてくれた、一緒にいるマキを見二人とも躊躇する。

一平さんこちらが言っていた焼酎好き女性と高柳さんが聞いて来た。

「はいそーです、村上真姫って言います、通称マキで通ります」

マキが一平を差し置いて言った。

高柳ですと両手で握手してきた、遅ればせマキと呼んで下さいと握手を返した。

「一平さんこちらの女性とどのような間柄ですか」

父娘以上の父娘ですとマキが答えた。

村上水軍の血筋を引く柔術道北野流の道主のお孫さんですと、一平が添えた。

「一平さんお分かり申した、これから課外授業がある、末吉に四年前に廃校となつて終った末吉小学校がある、その校門で夕刻会うでしょう。学校の前が教員宿舎で我家はそこです。車で数分の所にみはらしの湯があり太平洋

が一望でき露天風呂もある、夕刻そこで汗を流してくれ。車はこちらのお嬢さんと一緒に行き受け取って下さい」

高柳さんありがとう、じゃー帳の頃校門でと一平は見送った。

会長さんの車はこちらですとお嬢さんが駐車場を進み始める。

一平は小生を会長とはとお嬢さんに尋ねた。

「お嬢さんとは否ですよおばさんでいいです、今はここで働いていますが私は北野小の保護者でしたよ、会長さんも良く存じ上げています」

「いやー申し訳ない、小生は・・・」

「分からなくても気にしませんよ、保護者の数もことは桁違い、無理な事です」

そーこー話しながら歩を進めていた時、右手方向から何するんですかやめて下さいとか女性の声が聞こえて来た、六尺に成らんとする男二人が若い女に迫っている、あいつら又やりおつてるとお嬢さんは舌鼓を打つ。何の事ですかとマキが聞いた。

「島の悪ガキ二人が女性旅行者に言葉巧みに近づき古びたジープに乗せ案内料をせしめたり、茂みや暗がりて淫らな行為を強要したり困ったもんです」

「警察はどー対応しているんですか親や兄弟は」

「被害者は女性、後が怖いのか泣き寝入りが殆ど、勇気ある女性が出たとしても知らぬ存ぜぬ、例え訴訟起こしてもすぐさま出て来て繰り返すあり様、あいつ等は島の恥じゃ」

「さつきも聞いたように親兄弟はどーしているんですか」

「二人の兄弟は東京に行って帰って来しない、それぞれの両親はロベ作りと漁師をしているが勘当もんと突き放し家には入れない、ここには飲み屋が数件ある、そこでアルバイトをしているようです」。

「マキ、一丁焼きを入れてみつか」

と一平が言うもレンタカー店さんは言った。

「危ないよ怪我でもしたら大変だよ」

聞き終わらんうちにマキはその方向に早足した、一平も続くレンタカー店さんも。

短パンにノースリーブの女性二人、大学生の様だ、二人は嫌がるも無理やりおんぼろジープに乗せようとしている。

「嫌がつているじゃないか何しているんだ！」

とマキが檄する。

「ホォーいい助じゃねーか、こっちでもいいや俺達が島を案内するぜほれ乗んな」

「何グジャグジャ行つてのよ嫌がつているじゃないの」

「何だつたら俺達と良いことしようぜ」

そんな言葉が返ってくれどマキは動じない。遅ればせながら着いた一平が言う。

「あんた等の敵わぬ相手ではよしときな」

「こんなアマ、俺達の相手ではない遣つちまおう」

マキは二人から眼を離さずスカンツの裾を気にしつつピンヒールを後ろに脱ぎ捨て、サングラスをとり幅広帽子を脱いだ、帽子内に丸めた髪の毛がだらりと下がる。

それを見たサングラスをかけた男が罵声と共に鉄拳がマキ目掛けた、スカンツが二つになり片方が高く舞い上がる、右足がサングラスの男の顔にヒット、グラスが吹っ飛び後方に尻もち、左後方からもう一人が殴り掛かって来た、マキは蹴り上げた右足を引つ込め軸にし左足で側面へひと蹴り。

よつぽど効いたのか二人は蹲ったままだ、レンタカー店さんと二人の大学生は啞然とするもつつえーと言。

蘇生したようだが二人は顔を押さえながらジープに乗り込んだ、こらお前等とマキが言う、また蹴りでもと二人はぎつくつとする、ほらっ忘れもんだよとサングラスを下し投げた。

「あんな二人がいるなんて私達の八丈のイメージが崩れちゃった、でも有難うございます、いまので元に戻りました。卒業を前にし旅しようと二人で計画しました。第一弾が八丈島です一日に数便の路線バスと徒歩の一泊二日です」

「自分等は車利用だが今日明日の二日間、どうかで会うかもね」

とマキが言い学生等を見送った。レンタカー屋さんへ諸手続きと引き取りに向かった。

「利用料金は高柳先生から頂いています」

とレンタカー店さんが言う、一平は高柳の奴とブツブツ。

「鍵は受け取った、まずは植物園にでも行ってみようか、それとも着替える」

「はいそうです」

マキは店に着替えの同意を求めた。

「ここに更衣室も無いしこの狭さ、あるとすればトイレですが」

「こんだけあれば十分一平、トランク持ってきて来てここで着替える」

「連れ合いとは言え会長さんは男ですよ」

「構わんよ何時もの事、家の中だし囲いがあるだけです」

一平がトランクを運んで来た、壁に向かってはいるがマキはすでにTバック姿。

「スーパ一の袋に入っている腹巻とつて」

「これかい、腹巻にしては薄いんじゃない」

濡れなければ透けんよと両腕を挙げ胸に下ろした、短パンを履きグッチのベルトを通す、はい、マキの八丈バージョンの出来上がり、何時ものようにその場回り。

尻が少し出ているんじゃないですかとレンタカー店さん。

「そこがマキバージョンの真髄です」

レンタカーお嬢さんはポカーン、何が八丈バージョンだ、真髓だ、小生に言わされりゃー只の尻だしにすぎんと聞こえんように一平。

一平とマキは揃いの自衛隊キャップを被りお嬢さんに行って来ますと言い植物園方向へ。シーズンならアカコッコが飛び交っているだろうが影も見えん、植物園を観察グループに混じり散策を始めた、知識者さんがオオタニワタリ等シダ類の説明を始めた、少し先でカマキリを見つけ説明されたが名が想いだせん、後にマキに聞いたが無理な事聞くなと言われる。開けた所は蒸し暑さが伝わって来る、日蔭では力が忍び寄る、知識者さんが皆に力避けスプレーを渡した。露出度の高いマキは人一倍スプレーしていた。

オオモンシロナガカメムシが参上、マキがコンデジで撮らえる、キョンとホオジロカンムリヅルの飼育場を回り観察グループは拍手で幕となった。

「マキ、四半時で昼だ、少し早いが食処に行くとしよう」

「それ何処楽しみだ、何食べさせてくれんの」

「ピース国王夫妻と王女も行くとされている一休庵だ、こつから十分とはかからんだろう」

「うつひゃー楽しみだ早く行こう」

昼時前だ難なく席が取れた。

「高柳さんが言うには冷やしたぬきうどんがg o oとそれ食べてみよう」

マキがそれで行こうとベル押す。

待つ事十数分、お待ちーと緋に赤帯のお嬢さんが来た、美味しいよと付け加えた。しゃつこい汁にアシタバ色のうどん、揚げ玉に鰹節が覆いアシタバノてんぷらが添えてある。

マキがレンゲで一口、何も言わずにVサイン、高柳さんが推薦するだけある美味しいと一平も。

これなら国王夫妻も王女も美味しいというに相違ない、食し余韻に慕っていると昼時だ入り口に並び始めた、マキを

促し店をでる。

登龍峠から左回りで行こうと想っているが寄り道すると一平は言う、着いた所は八丈署。

「一平ここ、ひよつとしたらポリ署じゃないの」

「そー、ひよつとしたら八丈警察署だ、会いたい人がいて確認したい事もあるんだ」

ふーんと言い一平の後に続きマキも署内に、受付嬢に榊署長に会いに来ましたと告げた。

受付嬢は言う。

「アポはとつてありますか、ピース国王来島にひかえ署内はピリピリムード、無ければ会う事は出来ません」と、受付嬢が無造作に言った。

「あいすまん、急に来たもので、東京の一平が来たと言ってもらえんだろうか」

受付嬢はフーンと言った表情でコールした、受付嬢の表情が変わって来た、口開いた今直ぐ参りますそちらの長椅子でお待ち下さい。

マキはどうなつてんのと一平に聞いた。

「ここの署長は嘗ての部下なんだ、国王来島警備状態を聞きに来たんだ」

ややあつてデカ長さんよく来てくれたねと榊署長が現れた。

「こんな所では何だ署長室にどうぞ」

君、コーヒーを否コーヒーはまずいな、紅茶を入れて来るように頼んでくれないかと受付嬢に言った、すぐさま畏まりました。

「一平さん、来るなら連絡しといてくれればよかったのに」

「申し訳ない、着いたら署長を想いだし寄ったんだ、忙しいようだ直ぐお暇する」

「そんな事言わずにそのソファ―に座って下さい」

「ピース国王が来島するようだが警備が大変では」と尋ねた。

既に署では準備確認中です、でこちらのお嬢さんとは怪訝な面持ちで一平に尋ねた。

一平を制しマキがしゃべり始めた。

「その辺で補導されたものではありません、娘でも孫でも愛人でもありません、言えるのは父娘以上の父娘です」署長ははてなと更に怪訝さが増してしまった、やおら一平が話し始める。

「署長も知っているでしょう、柔術道北野流を」

跳びと合気道と剣道が合体した様な武術と聞いていると署長が。

「道主は村上一太郎、その孫は眞姫と言い親の一太郎に変わり北野流を背負っていこうとしている、容姿はご覧のあり様だがそのマキです、幼い頃、小生が道場に通っていたその頃からの付き合いなんだよ、父上は三鷹署のデカ長さんで道主も父上も認めたチョー年の差カップルって言うところかな、どこに行くにも付いて来る、言わばーいつも一緒や」

「付いてきてやっているんだ」

とマキは一平の脇を突つきながら言う。

「あいやお嬢さん否マキさん、怪訝な眼で見えてしまつて申し訳ない、国王警備は日本の威信にも係る、現在、警備計画を秘密裏に行っているところです、署員皆ピリピリしわしも何かと警戒めいて、すまんでした」

「で、どの程度進んでいるんだ」

「本国から警護担当も来るが八丈署独自で警備計画を練った、現在警視庁からは爆薬担当と潜水士が出動してくれる、保安庁へ海上警備本部にあさかぜを要請した、特殊隊も要請中。だけど車と船が足りない、漁業組合をお願いしている所です。警備、不審物捜査は来島一週間前から開始、以上が現在の警備予定」

「凄い自分、応援に来ようかな」

遊びじゃないんだ、一人では何にも役に立たんと一平はマキに言った。

「マキちゃん有難うもう役に立っている、八丈日報がさつき来て空港でゴキブリ共を蹴散らしたあの今女子は誰だと署に詰め寄って来た。親からも連絡が入りやむを得ず家に入れた、顔に氷を当ておとなしくしていと。奴らの繰り返す事案に署としても対応しきれない現状、八丈島の入口で旅行者達にちよっかい出されたんでは島のイメージダウンにつながり観光課も手を焼いていたところですよ」

「署長、その位にしておこうよ」

「もし警備状態を知り用でした順次お教えいたしますが」

「有難う、そーしてもらえるかな。これから登龍峠に上り左周りに上を見てくる予定だ、今夜は校長の高柳さんとここに泊まる事になっている」

「三原小学校の高柳先生かい、知り合いとは知らなかったあの先生も変わった方だよな、海も山も暮らしも八丈島が氣にいる、そんな訳で再び来たんだ、なり手が少ないというのに」

「一平も変わりもんだから馬が合うのよ」

とマキが、何でも言いやがれ、時間だと一平はソファから立ち上がった。

「一平さん、ゴキブリを蹴散らした女性が署に入ったと嗅ぎ付けた、事件が少ない島内、ニュース求めて文屋がうろつき始めた、捕まると面倒だ裏口に車回しとくように言っといた、裏口から」

「有難う、今夜は高柳さんと一緒に居酒屋大吉丸で35度です、宜しかったら」

一平に後れをとったがマキも言う。

「警察署長さんと飲めるなんて最高、お待ちしております」

マキの運転するムーヴは登龍峠に通じる都道215号八丈環状線を登り始めた、幾分おとなしくなった運転だがつ

つぱり時代を彷彿させるかそれが見え隠れする、九十九折の坂を一気に上り詰めた、そこは展望台になっている。天に上る龍の様な道、下から見ると龍が登っているように見えるからと名が付いた。ここからの眺望は絶するに値する、八丈富士や小島が手に取るように見える、底土港も神湊港も三根市街地も、夕日スポットでもあり新東京百景にも選定されている、冷やしコーヒーで一息入れた、マキが撮ってとモデルさんポーズ。

末吉方向に緩い下り坂が続く、略平たん路になり暫く走らせ左折を告げた行き止まりになった、徒歩で進むと白亜の塔が八丈灯台だ。

「づーと先の海の色が変わっているのが分るだろう潮目だ、黒潮が流れている」

紺碧な海をバックに又もやポーズ、一緒に撮ろうとセルフタイマーをセットするも上手くいかない。

一平は白壁に左手付きながらデジカメの操作説明、マキが幾分顔を起こしたその時、左手後方からキヤーツと共に御免なさいと女性の声、驚いたのは一平とマキだ何の事やら悲鳴方向を向いた。

「何も見ませんでしたと顔を覆った、壁ドンだのあごグイ見ませんでしたよ、灯台の角を回って海を見ようとしたら壁ドン顎グイだもん、驚いちゃったー」

二人の女性と言った。

「驚いたのはこっちだよ、いきなり悲鳴」

「自分達はセルフタイマーで写真撮ろうとしてた、操作が上手くいかず壁に寄りかかりあれやこれやとデジカメを弄っていたの、それが壁ドンあごグイに見えたんだよ」

とマキが言った。

「早とちりしてごめんなさい」

と二人は弁解。

「あなた達は空港でのお二人では」

と一平が言う。

「あつあの時の人、有難うございました衣装が違うんだもの分らなかった」

「小生は分かるだろ」

「甚平さんだが分かります、武闘家さんは他人に見えました」

ほら言わん事っちゃーない、誰だつて分らんよ、その出立ちではと一平。

「マキさんと言いましたね、そんな事ありません、私等も挑戦を考えています。でも勇気が今一、無難な服装になつてしまいました」

「でここまでは如何様に」

「あれから便少ない路線バスだが乗り継ぎ、時には歩き寄り道しここまで来ました。玉石垣のふるさと村から路線バスで大坂トンネル貫け、中野郷バス停で下車し地熱発電所、えこ・あぐりまーとに寄りました、パッションフルーツジュースが美味かった、種のブツブツ感が善かった売り子さん言うに、ここにはないが焼酎を半分入れると堪らんよと笑いました。後に裏見ヶ滝に寄り水の洗礼を受けた、藍ヶ江港の碧さを堪能し足湯きらめきで路線バスの時間調整、停留場で待つ間アシタバアイスを食べました、末吉でバスを降りここに来ました。もう少し灯台やらとこの辺をブラつきみはらしの湯に浸かり最終で大賀郷の宿に戻る予定です」

「小生等のみはらしの湯は最後やが行ける所まで今の逆で行く予定。明日は今日行き損じた所に出向く、昼は檜立のいそぎえんで御赦免料理を摂る事になっている。

南原千畳敷から八丈富士中腹の触れ合い牧場に行き、ジャージー牛のアイスを食べ飛行場に向かう予定」

「私等はこれから決めようと想っています、何処かで又、お会いしましたら宜しくお願いします」

「こちらこそ宜しく」

と一平とマキが言うと言界から消えた。

旅は楽しいもんだな行く先々で出会いも多い、マキを促し八丈灯台を後にする。

とあるカーブ手前で一平は社会科の勉強だと言って停めさせた、何の事じゃとばかりにマキは路肩を気にしつつ停めた。

「道脇の土手を見てみな断層になっているのが分るだろう、八丈島は玄武岩で出来ている、黒や赤紫色の火山礫を放出する噴火を繰り返した、だが八丈富士が出来る以前、二万五千年前頃八丈三原山には玄武岩と異質なマグマが活動し放出された軽石が堆積されている。この断層の表面にそれが見られ末吉降下軽石と呼ばれている。

軽石層に挟まった五センチの白い層が見えるよな、これは同時期鹿兒島湾北部が巨大噴火し全国に降下堆積した始良Tn火山灰です、以上」

「良く知っているじゃーないのどこで覚えたの」

「どーって事ない端に解説看板がある」

「どーりで一平らしい説明の仕方」

先へ行こうとムーヴに乗り込んだ。

末吉を過ぎ中之郷に入った、そこで一平は又もや止めるように言った。

「あの解説看板見てみな」

「ヤシの木の左側の看板ね」

しんのうやし雌雄の原木二株が大正八年に八丈島へ委託栽培されたと記されている。マキが読み上げた。

「それから言うものフェニックスロベリニーは大事に栽培され島全体に広がった、今日通称ロベは漁業と並び島の産業の要にもなった、栽培し易さもあり国内で生け花に使用する90%が八丈産となった、しかし芋焼酎生産から転業も多く芋農家が減ったのは事実」

「だから八丈産と言えども芋焼酎は少ない、35度の芋焼酎は今では貴重品だね」

そこより進み、地熱発電所の入口の交差点手前で中田商店を見つけた、ここだと一平、何回になるだろうかムーヴを止めさせた。

「食べてみよう、明日葉ソフトとやらを」

がつちり冷やされ仄かなアシタバ風味。

食した後地熱発電所に行き原理を勉強、八丈島の電気はこの発電所で賄っている、そこから少し戻り、えこ・あぐりまーとに寄った、一平はパッションフルーツを一袋購入しマキとPジュースを試飲。

「ちよいと酸味がありアルコールが入るとベターかも」

とマキが言う。

「この飲んべ」

と一平はブツブツ。

「何か言った」

かとマキが、いや何も言わんと一平。

215号線を外れ幾つかの追分を貫け藍ヶ江港見下ろす高台に出た、引き込まれそうな紺碧色に染まっている。

「漁港でもあるがこの港で遠泳大会が開催されるんだ」

フーンとマキはそらつぶいて返事する。

「年間を通して釣りや漁は出来る、春にカツオ漁が最盛期となる、羽田へは空路四十五分だ、新鮮さはどこよりも負けない、八丈産のカツオは高値で取引されている」

それ食べようとマキが言う、少量でもありここでは駄目だ、東京ならと一平は口籠った。

足湯きらめき脇から海岸へムーヴは下り進んだ、岩を削り貫いたように見える自然のプールが現る。泳ぎ人は疎らだ、マキが一平にちよつと泳いでくるねと言う。

「着替えるたつて更衣室はないぞ何処でするんだ」

「狭いけどこの中で」

「あられもない格好するんでねーぞ」

と言い一平はムーヴを出て行く。

「有難う着替え終わったよ、一浴びしてくるね写真撮つといてと」

マキは尻だし仕様の様な水着で天然プールに続く石階段を下りる、四半時程泳ぎ日光浴を楽しんだ。

「もっと回りたいんだが高柳さんの時間もある、裏見ヶ滝に寄りみはらしの湯で汗と汐を流し宿舎に行こう」とマキに言った、マキは黙って頷く。

上道に戻り右折した、少し進んだところに滝駐車場があり止めた。

「何で裏見ヶ滝って言う名なの」

「滝の裏側に空間があり通路になっている、滝を裏側から見れるからだ」

「今日は水量が多いようだ、可成り飛沫がかかるかも」

徒歩十分、滝の容姿が見える、左回りで滝の裏側に。

「飛沫でその衣装では透けてしまうぞ」

と一平が言う。

「見たけりゃー見せてやる」

とマキが粋がった、だーれもないがやばさすれすれの濡れ具合、一平がシャツを脱ぎマキにかけた。滝より下り駐車場に、十人程の学生さんらがYYし滝入口から登って来た、些かのマキだが安堵の表情。

五時少し前にみはらしの湯に着く。

「高柳さんの打ち合わせ時間もある、それに遅れん様に出てくるように」

マキに言い一平は男湯の暖簾を潜った、高台にあるみはらしの湯だ、絶景は島内一の温泉、眼下に紺碧の大海原が広がり遠くで海と空が交わっている。

露天風呂で東方向を見、この先ずっと行くとハワイがありアメリカと言う国があるんだとか年甲斐もなく瞑想にふける。

末吉廃校前で高柳さんと落ち合った。

あそこが宿舎ですと三階建ての建物を指さす、3LDKだ。

「一平さん、マキちゃんにこの部屋使って下さい」

と八畳部屋を案内された、マキが怪訝な顔つきになった、それを見た高柳さんもおやつとする。

「一平はこの部屋なの自分一人だけでこの部屋」

高柳さんに聞いた。

「マキちゃんは女性ですよ、しかも独身の、一平さんは所帯は持っているがここでは私と同じ独身です、同室では些かと想いますが」

「一平何とかしてよ、別部屋だつて」

「高柳さんに言っていないかったかな、マキとは父娘以上の間柄なんだ。」

世の親御さんは年頃の娘には何ですかはそんなはしたない事してとか、男性の前では身なりを整えなさいとか、又、親の前では情け容赦なく振舞いもするであろう。皆がそーだと限らんがバスタオル姿で出てきたり、取り込んだ下着の洗濯物を終わずに人目の届く所に置いたり、互い父娘だから出来る事であり信頼もある。

マキとはそんな関係なんです、道主村上一太郎殿、父親三鷹署村上捜査課長殿、無論まりも公認、宿泊鳥観寮会は何時も一緒の部屋、父娘だもん一向に気にしない、マキは下着姿だつて寝顔見られたつて構わんと主催者に申

し出ている」

「一平なら安心、父っ様ななんか洗濯物畳んで部屋の隅に置こうもんなら異様な眠つきで見ているの、嫌らしいったら
ありやいしない」

「たとえ捜査課長さんだつて紐みたいな下着見ればおやつと想い見るだろう」

と一平が父親をカバーする。

あいやお分かりしたと高柳さんは言い出発は七時と告げた。

「小生はこれでいいがマキ、着替えるか」

着替えますと部屋に戻った、リビングで二人は昔の思い出話に花を咲かせた。間もなく時間ではと一平は時計を見た、背後でお待ちどうさまとマキの声、振り向き二人はアツと発した。浴衣姿のマキが、どう決まってるでしょ、といったものにその場回り。ベースは黒で淡い青と白のグラデーションの入った朝顔柄、帯は明るいグレーで蔦編みの巾着バック持っている。

「後は赤い鼻緒の下駄を履けばマキ浴衣バージョンの出来上がり、帯の締め方まりさんに教わったんだけどちょっと挺摺っちゃった、でも上手くいってるでしょ、早く行きましょーよ」

突如ルパン三世が俺も連れてけとばかりに喚き始めた、榊署長だ。

「一平です、今朝程は突然押しかけて失礼した」

「いやー何の事はない、表敬訪問して頂き有難うございました、でなんだー、校長先生も一緒と聞いていた俺も仲間に入れて頂けんかな」

「構わんよぜひ一緒に、大吉丸だこれから出る」

車に向かいながら、榊署長も何をと言われても返答に困るが変わっている署長ですなと高柳さん。

「一平の知り合いは皆そうだ」

とマキが言った。高柳さんが自分を指さし俺もその一人だなど、一平は苦笑いしマキもそーだと付け加える。高柳さん、運転するワゴンカーは大坂トンネルを貫けた、大賀郷に入り大吉丸駐車場に入る。のれんをくぐった、既に若い男女の旅行者で満席だ、マキの浴衣姿におやつとする人もいる、仲居さん風な店員さんが高柳先生こちらですと円形テーブルに案内してくれる、あと一人来ますと告げた。

店員さんが四人分のおしぼりとコップに氷に箸を置いた、先生これが芋の35度ですと置き在庫はいくらでもあります、肴が決まりましたら呼んで下さい。

「もうすぐ来ると想う、来たら始めようと想っているちよつと待って下さい」

畏まりましたと店員さんは帳場裏へ、多分大学生であろうここかしこのテーブルで芋焼酎に魚介類で花が咲いている。

じゃーとマキが言い始めた。

「ねー一平、お土産の35度ここで頼んでいいでしょう」

「構わんが他にもあるのでは、一本か二本だろう」

マキがすかさず言い出した。

「のりとりえにさちさんだろ、自分用だろう偶には爺っ様にも買って行こう、父っ様はどうしようかな。ざつと数えても6本あるよ一平はどうするの」

一平さん、と高柳先生がしゃべり始めた。

「その数だと蔵元に頼んだ方がよいよ、僕が注文してみますが」

はい、そうして下さいと一平を出しぬいてマキが答えた。

「一平、いいよね先生にお願いしちゃう」

マキに押されつばなしな一平は観念した表情、着払いでと送付を高柳さんをお願いした。

マキの浴衣に署長がおやつと笑しながらいやーバスが上手く来んで遅くなってしまった、と派手目な甚平さんでテーブルについた。

「出がけに一平さん等と高柳さんと飲んで来ると家内に言ったら、あら一平さん八丈に来ているの、までは良かったが変わりもんの寄り合いねと言いやがった」

「署長さん事実です」

マキが奥方をホローする。

「店員さんお願いします、肴はお任せし希望があればその都度お願いします」

マキは手慣れた手つきでロックを作る、乾杯の音頭は署長がかつて出る、高らかにカンパイで拍手。ところでマキちゃんと署長が言った。

「八丈新報の夕刊に広報室でも仕入れたのだろう若き女性武闘家、八丈島のゴキブリ退治と写真は載っていないかったが白抜きで出てたよ」

「それって自分の事かな」

「そうだマキちゃんの事だよ」

「あいつ等は時折学校に来ては若い先生達にちよつかい出して困っているんだ、その都度私等男の先生が駆け付けては追い払うんだが馳ごっこ、家はロベ農家と持ち船漁師の家なんだが勘当もの、体格もいいし家の仕事を継げばいい跡継ぎになるんだが」

それを想い出し振り返るかの如く高柳さんが言う。

「今後あいつ等が何か問題起こしたら直ぐに自分に連絡して」

とマキは言い飲み干し、作れとばかりに一平の前にグラスを置きなおもしゃべり続ける。

「後二人酒豪が居る、三人で35度焼酎とゴキブリ退治ツアーと称します」

ばっかいつてんじゃーねーと言わんばかりな一平、だがロックを作り始めた。

「マキちゃん呼ぶぜ頼んだよ、あいつ等は卒業生なんだ真つ当な生活させたいんだ」顔を曇らせながら高柳さんは言う。

「何を隠そう一平と出会った頃自分はバリッパリのつっぱり、何時しか見境が付いた、更生は一平の得意分野だよ一平のが上手かも」

そうか一平さんはそんなに上手か、署で特任扱いしようかなと署長。

「一平それがいいよ、何時も35度飲めるよ」

ウツと発しマキを見、アシタバのサクサクてんぷらと珍味ブドをとった。マキが刺身の盛り合わせを小皿にとったがあれつとする、ワサビがない。マキちゃんと高柳さんが言う。

「八丈島ではワサビはその昔は高値の花、高価なワサビに変わり島では青唐辛子を刻み醤油に入れた島とう醤油で食するんです、カラシも良く使います」

これがそうです、ガラス器より小皿に移してマキの前に出した。

「おおいける、ピリツと小さく跳ね返る食感が堪らんよー35度が進んでしまいそう」

そんなマキを一平は飲み過ぎんなよ、食べ過ぎんなよいつものようにブツブツ。

いつの間にか一組二組と出て行き始めた、小生等の丸テーブルは盛り上がり続き、三本目の35度も残り少なくなつてきた、ご主人もう一本頼むよと署長。

客は丸テーブルだけになってしまった、酒豪の署長だがそろそろと一平と高柳さんを見た、マキは聞こえんのか食べて飲み続けている。

「飲んべに言っても無理だ、おあいそと行こう」

一平は店員さんと呼んだ、あいや待たれと署長が言い出した。今宵は俺が持つ、表敬訪問された一平さんや校長

先生に払わす訳にはいかん、俺に出させてくれと言う。

署長に出させる訳にはいかない、割り勘でと校長先生が言うも効かない、結局は署長に御馳走と相成った。店主が出て来て八丈にお越しの折には大吉丸にお越し下さい、包みを署長とこっちは校長先生たち様ですと渡した。島寿司のネタとシャリが入っています冷蔵庫に入れ朝食にして下さい、マキが真つ先にご馳走様。

「タクシーと運転代行さんが見えました」

と店員さんが伝える、署長は再開が楽しみですと於保つかぬ足取りでタクシーに乗り込んだ、見送った小生等もワゴン車に。

末吉の教員宿舎に到着。

「マキちゃん見上げてごらん」

飲み過ぎたか焦点を合わせようとするマキの目、次の瞬間キャツホーと喚いた。今にも降ってきそうな満点の星空。

「あれが北極星で北斗七星、カシオペアにオリオン座と星座の数々です」

見た事ない星空にマキは童心に帰る。

「先生、無数に光続いている帯の様なのは」

「あれが織姫と彦星を別れさせている天の川だよ」

今時の三鷹では見られない星星星、マキは感動し無言で見上げ続けた。

翌朝、一平は朝散から帰って来、高柳さんがおはよーと声を掛けマキちゃんが朝飯の準備をしてくれていますと、具を切るトントン音と共ににおはようとマキ、何時もの様に一平はオッスと返す。

「昨夜頂いた酢飯と具で島寿司、それに味噌汁です、一平は収穫合った」

「アカコッコが掠り、スズミグモや昆虫さんが少々」

「ぼうずで無くて良かったね、味噌汁が出来たら朝飯にするね、もうちよつとだ」

「慌てんでもいいよ、高柳さんの時間に間に合えば」

「マキちゃん、僕は九時に出ればいいんだ、茶碗は右の戸棚に入っている」

高柳さんと一平は昨夜の35度談義を始めた。

「四合瓶とは言え三本半、よく飲んだなー二日酔いを心配してたが良い酒は後引きがないな」

「小生もそれが気掛かりだった、何時ものように朝散時間に目が覚めた」

「だけどマキちゃん強えーなー二本近く飲んでるんでは」

台所で調理しているマキが聞こえてると言い出した。

「酒はだーい好きです、飲んでいると色が変わるんだよと相棒番組、鑑識役の俳優さんも言ってた」

「その番組僕も見えています、ちよつと恍けもあるが芯もあり信頼できる鑑識課員を熟す、毎回楽しみにしています、で、色が変わるって飲み過ぎて青い島も紺碧な海もピンク色にでも変わるって言うんですか」

「そうじゃないの、人誰しも多かれ少なかれ問題を抱えていると思う、校長先生も一平もだ、自分は飲み始めるといやな事を忘れ楽しさだけが残るのよ、それが明日への良き充電になり問題解決にも繋がるんだ、一平達もそーでない」

マキの言に二人はキョトンとし顔を見合わせた、一平がマキに話しかけた。

「昨夜は多少なりとの足元だったが今朝はしゃんとしている、善き充電できたようだな」

35度の焼酎をあんなに飲んだ女性は八丈にはいない、店長が言ってたと高柳さんが言う。

「祖父村上一太郎は瀬戸内海は村上水軍の末裔のその又末裔・・・一升瓶を逆さにし飲んだと聞いている、その孫だ女とは言え幾ら飲んでも自分を見失い事はない」

一平さんお分かりしたよ、武術だけではなく酒術も受け継いでいるんだなと高柳先生、そうこう二人で言ったら見よう見まねで島寿司出来たよとマキ。

「握りは上手くないので島寿司井にしました、味噌汁はアシタバに冷蔵庫に入っていた豆腐と油揚げを、一平テールに運んで」

あるもので料理する、僕も真似るとなと高柳先生。

「自然流マキ流です、それよりもそっちの部屋で自分の悪口言ってたでしよう鼻がむず痒い」

再び二人は顔を見合わせいったきまーす、やっぱしなんか言ってたんだなと想うもマキも頂きます。

「僕は午前中は課外授業だ、九時には出るが一平さんの予定は」

「天気も良さそーだ、足湯きらめきにより大坂トンネルの展望台で八丈小島を見、大賀郷で玉石垣のルーツを勉強、民芸あき店でお土産を買い入れ送付、この辺で昼だろうご赦免料理も選択肢の一つだが今日は藍ヶ谷水産。食後は会う人がいるので南原千疊敷に行く、マキが誰と会うんだろうとした表情だ、高柳さんはあの人とだなと口を緩めるが一平は予定を話し続けた。再会後は八丈富士の中腹までムーヴで行きアイスを食し飛行機の発着を見、後に飛行場に」

「会長さん、昼から付き合おう、藍ヶ谷水産に十二時少し前には行けるだろう食後にレンタカーを返却し僕の手で行きましょう」

「了解した高柳さんが一緒なら安心だ。再会人も心待ちにしているだろう。

何度見てもいいよな目の当りに出来る着陸は、逆噴射音堪らんよ」

と言いなながら高柳さんがPフルーツ丸々一個使ったジュースを作る。

「八時だ準備しなければ」

とマキは言い洗い物を終えマキバージョンその2と言いダイニングを出て行った。

一平も甚平に着替えると後を追う、相も変わらず平気ですっぽんぽんになっていた。

「見たけりゃー見ていいよ」

と一平にちよつかい出したが無言でスーツケースの整理を始める。

「一平見て、マキ八丈バージョンその2よ」

着替えたがチョーが付く短パンに隆起が大きいのかブラジャーが小さいのかはみ出している、それは明らかに後者の様だなど一平、フンと言った表情のマキは半袖のスケスケシャツを着た。

「ボタンは掛けずに裾を適度に纏め胸下で前縛りすんの、どう中々でしょ」

「へそが出ているがな」

「爺っ様が言っていた、若し頃日活の女優さんがよくしとったと」

「単に尻だしへそ出しのスケスケやないか、犯罪者を煽るようなもんだ、飛行機もそれで」

「飛行場で着替えるよ、まりさんバージョンに、それらはスーツケースの出しやすい所に入れといて」

一平はジャージイ牛じゃないがモーと一声。

「先生、奥様はどーなさっております」

「単身赴任です家は立川にあります、二人の子に恵まれ今は地方で所帯を持っています、家内は手持ちぶたさの折アルバイトをしながら家を守っています」

「淋しがっているんでは」

「ご心配には及びません、校長会が月一で都庁でありその都度立川に戻っています」

マキ、くだらん詮索せんと、と一平が一喝す。

高柳さんは学校へ一平とマキは島内観光へ。

地熱発電所入口先を左折し道なりに進んだ、五分で足湯きらめきに着く、朝のせいか入浴者はいない。

「ビーサン脱げばいい、タオルだけ持つように」

「ここも高台にある湯だ、眺めがいいだろう」

「一平あそこの策の上に鳥が」

「アジサシだちよつと遠いが」

と言いつつ数ショット治めた、十五分ほど浸かり先があるとマキを促す、大坂トンネルの展望台へ。

「ここで八丈富士の裾野と小島、南原千疊敷と青い海が重なりファインダーに納まるんだ、それに夕陽が絡めば申し分ない、多くのカメラマンが来る撮影スポットになっている」

「今日は時間的にダメね」

「まー何時になるか分からんが次回は予定組むとしよう」

「もたもたしていると女性だけで来てしまうかもよ」

勝手にせい、と言いい中之郷の中里玉石垣に行くように言った。

「強風が多い地区なので家屋を守る為に玉石を積み上げ土手を作った、そこにシイ等常緑樹を植え防風林を形成している」

「でも丸い石じゃー重ねる事出来ないよ」

「上下端は別だが良き見てみなそこ以外を、どこをとつても一つの石に六つの石が接しているだろう、それが六法積み工法なんだ、誰が考案したかは小生には分からんが崩れんのよ、島流し罪人を使いその石を海岸より運ばせた、運び終わらない者には褒美のにぎりを与えなかったとされる」

「罪人さんには申し訳ないがその積み重ね技術すごいね」

「今では距離もあるが海岸から現場に一つ運ぶと五千元と言う、どーだいやってみつか」
マキは無言で頸を横に振った。

「でも一平、大坂トンネルでもそうだったが鳥さんもないのに風景ばかり何で撮ってるの」
マキが言った、色でも変わらんかと想って撮っているんだ。

「はがらすんだから、でもどうでもいい」

一平はズームレンズをテレワイドし撮り続ける、時にはマキそこでポーズと言いながら。

飛行場や港にも近く島の中心地にも近い、そのせいか他の見所と違って家族連れやら散策者が多い、だが一平等のような年の差カップルはいない、マキの八丈バージョンその2を見つけお孫さんと一緒に撮らせて下さいと数パーティが来るしまつ。

中里を出て民芸店あきに、マキは黄八丈の財布を買う、同じく黄八丈のストラップ等を十数本購入、のりや幼稚園の先生用と言う。

「一平は何買うの」

「まさに同じく黄八丈のエプロンと小生用に付箋でも」

35度はいいとしてそれに、マキがお土産と言ってたって自分用だろうと一平。

「否さっちゃんとのりと」

「まだ何か買うの」

と一平が言い出した、が時間だ食処に行こうとマキを促しムーヴに乗った。

高柳さんが倉庫のような場所で分かりにくいかも知れんと言っていた、カーナビの言う通りに進み到着、着いたはいが空き地に窓もなく大きな倉庫だけ。道路から倉庫の裏手に回った、そしたらあつた藍ヶ江水産の暖簾が、高柳さんのワゴン車はまだ見えない、如何にも倉庫らしき木戸を開けた、干物を主体にした魚が並ぶ、トビウオやメジナ、ヒメダイを物色する。

遅くなってしまったと高柳さんが入って来る。

「一平さんここに来たならクサヤも仲間に入れてやって下さい」と言う。

「今はパック詰めになっていて匂いは気にせんでいいよ」

じゃーそれもと一平は店員さんに告げ配送手続きを済ました。

「会長さん、お土産は出来た、ここで食事としよう」

「ここでも言っても社員食堂で見かける様なテーブルが幾つか並んでいるだけだが」

「そこです、素朴感あるだろうそれが八丈島だ、壁に品書きが六品書いてある」

マキは縁起物の魚だよねとトビウオにした。

「小生は地魚漬井にする」

高城さんはカサゴを、いかにも漁師奥さんに見える店員さんに告げた。

お待ちどうさまと出て来たお膳にマキと小生はアツと発してしまった、魚の大きいことお膳からはみ出している、他に器の数々が、店員さんがご飯のお代わりはご自由にとダメ押す。

・・・井ぶりに山ほどのご飯、大食いのマキもノーギブアップと言うが聊かの表情をする。

でも三人は完食した、見計らい店員さんがお茶のお代わりを持って来た。

「次回も八丈にお越しの折には是非とも当店にお寄り下さい、お待ちしております」

ワゴン車とムーヴはレンタカー会社に向かった、例のお嬢さんが出迎えてくれる、マキの八丈バージョンを見て言う。

「かつて私もやってみましたよ、そのシャツの前縛りの着方、また着てみようかしら」

「ほーら見なさい自分だけではないでしょう」

好きにせいと一平は言いカギを返した、スーツケースを積み返しながらその大きさに校長先生は、でっかいな重いなと頻り。

ワゴン車は街中を貫け海岸を走る、ねー校長先生とマキが話しかける。

「昨日も同じような大きな建物を見たんだけどあそこの白亜の建造物は何」

「廃墟となつてしまつたリゾートホテルだよ、昭和四十年代頃羽田から行ける楽園の島として人気を博していました、人々は八丈へと靡いた。その後、円高で海外旅行も身近になり海外へと向いてしまふ、需要も減り2005年頃には其々のホテルは撤退し廃墟となつてしまつたんだ」

フーンとマキは返事をしてしているとワゴン車は草原地から黒岩のつづなる海岸に出た、一平が合う人とは誰だろう、男か女かはたまたミスターレディー、それはないとか珍しくマキは落ち着かない。

「八丈富士が噴火した際玄武岩が溶岩となつて海岸に流れ出ました、この様なごつごつとして黒い大きな溶岩台地が形成されました」

フーンと又もやマキが答えた、で一平が合おうとしている人は何処に。

「会長さんはマキちゃんを於いてそんな事はないよ」

でもと高柳さんに食い下がるような眼差しをした、一平が笑いを堪えるか肩が揺れている。

「駐車場に早く停めなくては、合い方を待たせては男の恥ですよ」

と高柳さんは意味深に一平に言う。

「そーか、待ち合わせ場所はおそこだな」

と一平はムーヴから降り歩を進めてた、マキも高柳さんも続いた、一平が言う。

「マキ、小生の合い人はここに居られるお二人だ」

と大きな台に座つた二つの彫像を腕で示した、高柳さんが話し始める。

「それらは戦国の武将宇喜多秀家と妻の豪姫です、秀家は関ヶ原決戦のおり光成率いる西軍に加担し副将として出陣した、味方の寝返りに会い家康に敗れてしまふ。家康家臣の前田利家の娘を妻にしている秀家を家康は打首せず、子等二人と共に八丈島へ流刑した、豪姫との今生の分れとなつてしまふ。因みに宇喜多秀家は島流し第一号です。他罪人に赦免はあつた、が、徳川家は宇喜多一族をけして赦免する事なく明治まで続いた」

「島流し第一号が秀家とは知らなかった」

マキちゃん続きがあるんだと高柳さんは話し始めた。

「平成九年岡山城築城四百年、それを記念し作った宇喜多秀家と豪姫の彫像、それは故郷の岡山に向かい愚痴一つ零さず座っている。関ヶ原合戦後離れ離れになっていた秀家と豪姫はここで再会、八丈小島と夕陽を見ながら暮らし始めました。そんな二人に八丈に来る度に合いに来ていた会長さん、歴史の授業完了です」

何故かマキは安堵感を漂わせ高柳先生に拍手した。

高柳先生は八丈富士の中腹目指し運転し始めた、運転から解放され助手席でウキウキの鼻歌混じりなマキ、樹木も茂るが広い舗装路を進んだ。

樹木も減り周りが開けて来た、鉢巻き道路に突き当りを左折し僅かしてふれあい牧場に着いた。七合目550m地点だヒンヤリする。

「このアイスは格別です」

高柳先生はショップに案内してくれる、言われるままカップアイスを購入、美味しい、牧場の緑と空の青さのコントラストも手伝つか更に美味しい、想わずマキは美味と一言だけ言い無言。

食べ終わり時間だ展望台へ行こうと小生等を急かす、牧場の中にまっつぐな火山礫で出来た赤い道が続きジャジャーンやホルスタインが闊歩しては歩を止めている。

振り返れば八丈富士が悠然たる容姿が小生等を見ている、都会の喧騒と無縁のようなロケーションだ、ブラブラせしだが五分で展望台に着く。向かいには八丈三原山、眼下には八丈空港の滑走路が左右に伸びている、左は底土港で右が八重根港、三根、大賀郷地区が、パノラマが広がっていますと高柳先生が言う、時計を見ながら間もなくだと言う、左方向上空を頻りに見ている。

来たぞーと大声を発した、マキも展望台にいた数人の学生さん等も何事かとその方向を眺めた。

「マキちゃん左25度方向を見てみな、点のような明かりが見えるだろう飛行機だ、間もなく着陸するよ点が大きくなってきた、機影が見えて来たでしょう」

「どんどん降下しているのが見える」

タツチダウンするとパット煙が上がり逆噴射音が響く、降下中の機にマキの眼が点になっていた。

「タツチダウンした煙が上がった、すっげー爆発のような轟音だ、速度は落ちたが右の端に進んでいる、ターミナルは左側、どうするんだろう」

「ここには誘導路がない、滑走路でUターンするんだ見ていな」

「ほんと機首を右に振り始めた、180度転回したよターミナル方向に進み始めた」

「マキちゃんと会長さんはあの飛行機で帰るんだよ。誘導施設がないんだ発着陸はパイロットの判断任せ、大事をとって欠航も多い、こないだなんか台風続きで校長会欠席してしまった、又、行ったわいいが帰ってこれなかった事もあった。だけど今日は大丈夫、天気予報で極端に天候異変はないと言っていた」

「今日は欠航しないの、そうしたら又35度飲めるのに」

馬鹿言ってるんじゃないのと一平。

空港まで送って頂き再会を約束し別れる。着替えし保安検査所を通り待合室に、マキは来た時のまりバージョン、疲れたか一平に寄りかかった。

座った時二人の女性と目が合った、来た時飛行場でゴキブリ共に絡まれていた学生さん二人だと感じた、二人は頻りとそつと見ていたがふんぎり着いたか近づき一平に声を掛ける。

「絡まれていた時助けて頂いた方では」

「はいそーです」

「御連れ合いの女性がその時の方と違っているように見えましたから」

「顔はすっぴん、日焼けしただけで衣装は同じですが」

「あの時灯台で逢った時の衣装が私達には残っているんです、この衣装も悪くはなく印象もありますが灯台衣装が強烈に残っているんです」

やおら背を伸ばしマキが言い始めた。

「別人に見えました、一平は自分以外の女性と八丈島なんてないよ」

「ごめんなさい、さつきも言いましたように灯台ルックが焼き付いていました、人違いではと」

「なんならいいよ、で自分等に何か用がありますの」

「はい、大あります」

と二人でハモらせた。

「卒業旅行第二段は来月二十五日からツアーで石垣島に行つて来ます」

「いいね、小生はまだ行っていないが、気候もいいし星の砂のビーチもあり野鳥の宝庫だよ」

と一平が、話半ばで、連れてつてくれたつていいんだよと、マキが言う。

「で、その石垣島がどうかしたの」

とマキが聞いた。

「石垣島じゃないのマキさんのファッションの事です、常々挑戦したいと思うもふんぎりがつかなかった、尻だしショーパンルック」

マキは想い出すように言う。

「最初は勇気いるけど二回三回と回を重ねて行くと、視線も平気になり街でも行楽地やリゾート地でもマッチし溶け込みます」

「私達はそれに挑戦したいんです、サイズとか何かアドバイスお願いします」

「自分はパンパンのGーインズを切り詰めては履き、その繰り返しで自分流に作ったが街中でカラフルなそれ用のショーパンも売っている」

「マキさん東京に帰ったら食事しながらでも買い物付き合って、一緒に居てくれると心強いですが、あつそーだ、いけない言いそびれてしまった、私達は体育大学の学生で学生寮に入っています」

「体育大学は自分の近くに日本女子体育大学があります」

「ウアー、良かったマキさんの近くだー、一年の時から同室で彼氏以外は好み等略一緒です。買い物は吉祥寺でも新宿でも原宿でも」

一平は一緒に一緒に行っておやりとこつくりする。

搭乗のアナウンスが流れた、二人はスマホ番号と名書きをマキに渡して搭乗口へ、小生等も行こうとマキを促し列に並んだ。